

## 大字内における道の変遷から読み解く集落の構造 ～茨城県石岡市真家を対象にして～

建築史 中谷礼仁研究室 千年村研究ゼミ 1X14A095 豊田通

## 目次構成

## 【序論】

## 第1章 本研究について

- 1-1. はじめに
- 1-2. 研究の目的
- 1-3. 研究の方法
- 1-4. 本研究の基礎情報
- 1-5. 既往研究
- 1-6. 本研究の位置づけ

## 【本論】

## 第2章 茨城県石岡市真家について

- 2-1. はじめに
- 2-2. 真家の基礎情報
- 2-3. 真家のため池の存在
- 2-4. 小結

## 第3章 真家における集落の成立の順序

- 3-1. はじめに
- 3-2. 真家の稲作農業の成立
- 3-3. 集落と水田の関係
- 3-4. 水田の周囲の道と集落の関係
- 3-5. 小結

## 第4章 先行形態論による真家の集落の結びつき

- 4-1. はじめに
- 4-2. 現在残っている真家の集落と集落を結ぶ主な道路
- 4-3. 先行形態から言える集落と結びつき
- 4-4. 小結

## 第5章 真家の先行形態論が現代に及ぼしている影響

- 5-1. はじめに
- 5-2. 瀬戸井街道の先行形態
- 5-3. 補 真家の先行形態が現代に及ぼしている影響
- 5-4. 小結

## 第6章 考察 真家地区における1000年間の集落形態の結びつきの変化と連続性

- 6-1. はじめに
- 6-2. マルクスのアジア的生産様式から見る真家
- 6-3. 小結

## 第7章 結論

## 第1章 本研究について

## 1-2. 研究の目的

千年村プロジェクトの調査にて茨城県の真家を訪れた際、直感的に、バランスのいい集落だと感じた。このバランスのいい集落がどのように形成されていったかを解明したいと考えた

## 1-3. 研究の方法

先行形態分析を適用して、以下の3通りの検討を行った。

1. 集落立地と水田までの道のつながり方を検討すれば、その集落がどれくらい古いのかを推定する。
2. 集落と集落を結ぶより大きな道路ネットワークを考察。
3. 大字同士の広域を結ぶ道の先行形態を考察。

## 1-5. 既往研究

1. 中谷礼仁「先行形態論」『セヴェラレルネス + 事物連鎖と都市・建築・人間』（鹿島出版会）

「先行形態論」では場所の固有性を規定する存在である「先行形態」とその事例を通して、都市及び生活領域での問題提起を行っている。場所と空間の定義とその拡張を試みており、これは本論文における旧真家\_館跡の位置付けとも通じるものであると考えられる。

また、先行形態の実例として古墳が取り上げられており、古墳が過去の事物ではなく現在ある建物として捉えている点は非常に重要である。この過去こそが現在であるという視点は、現在残っている真家の集落と集落を結ぶ主な道路や集落立地と道の関係を考察するに際して十分に成立するだろう。また、現代の真家が原型的かつ持続的な集落であることを研究するに際しての前提としても十分に成立するだろう。

## 2. 玉城哲, 旗手勲『風土: 大地と人間の歴史』

著者は、「風土」というものは、本来の自然が決定するものではなく、人間が自然に働きかけることによって自然を作り変えていくことにより、また、人間生活の広がりである社会関係により、自然を一つの風土へ転化せしめていくのだとしている。そして、日本の水田と灌漑・排水施設、よく制御された河川は、日本の風土の根幹をなす文明的自然そのものであるとして、古代から近世後

期に至る灌漑、水田形成の歴史、稲作農業の展開を明らかにし、日本の風土の特質を明らかにしている。一見、のどかな自然に恵まれた真家の風景も、ほとんどが農業活動により作り上げられたものであることに気づかされ、共同作業が不可欠な農業用水の管理という視点を与えてくれる論文である。

## 3. 木村礎『村落史』

著者は、「村落景観」には、人間の労働の長期にわたる歴史が刻印されており、村落景観を通じて、その時代の民衆の歴史を眼前に浮かび上がらせることができるとしている。村落景観の中心は、集落と耕地であるとし、古代以来の代表的村落景観について、その持つ意味を考察している。

日本における共同体を論じた第4章は、マルクスの著作をほとんど読んでいない私には難解である。他方、現在の景観から、近世の景観の復元を解説している第3章は、実践的で参考になった。中心道につながる小支道の分岐が、本家と分家の関係を示しているという返田村の例には、先行形態論の有用性をみた気がする。

## 2. 茨城県石岡市真家について

『和名類聚抄』に古代地名「山前」として地名がのこっている真家地区は、筑波山塊の西北部の山麓斜面から東部の低地に東西に細長く広がっており、中央には園部川の上流部が2条にわかれて狭くて浅い谷をつくっている。2筋の谷の間には、西北部の斜面から延びた舌状の大地がゆるやかに伸びている。北側の谷は、沢水の量が少ないので、ため池を作って、水不足を補っていた。

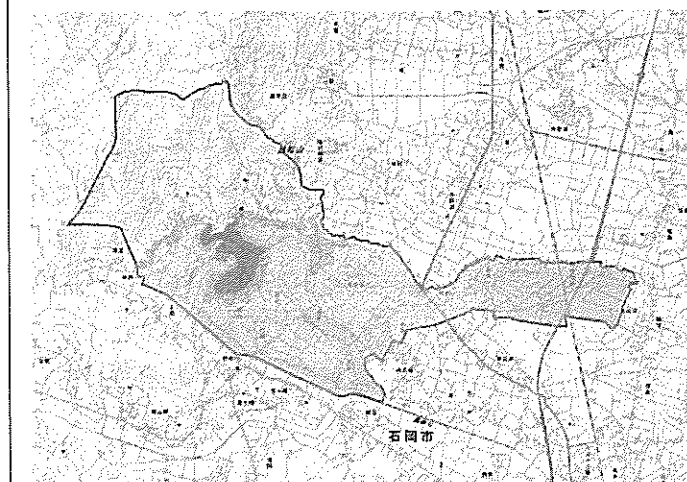


図1. 真家の舌状台地

## 第3章 真家における集落の成立の順序

真家における集落の成立の順序だが、茨城県では弥生時代に稲作が始まっており、真家でも弥生時代に稲作ははじまった可能性がある。

集落と水田との関係だが、水田が開かれたとき、水田の周りは、水田の様子をみて回るための道となると考えられるため、水田の横に残っている道は、水田が開かれた当時の人々の手によって作られた最初の作業道であると考えられる。そして、この作業道に接続している小道は、当時の人々が水田に通うための言うなれば通勤路であったので、作業道と同じくらい古い道である可能性がある。

この道と、真家の集落の一つ一つの間を接続すると、次の4つのタイプに分けられる。

1. 水田の周りの道と集落が細い道で直結している園中、白幡、郷中、小堀、山根集落は、水田の成立時期と同じくらい古い可能性があり、谷の入り口から奥に向かって開発が進んでいったとすると、集落は、この順番で新しくなっていくと考えられる。
2. 瀬戸井街道に面する真家宿集落は、江戸時代に整備された宿場町で、真家集落から移住した人たちで作られた集落である。
3. 集落から水田に直接出る道がなく、細く枝分かれした道を辿っていく長原集落は、江戸後期の浄土真宗門徒の移民によって成立したものであることが伝わっている。
4. 北側の谷奥の真家集落は、水田より一段高い斜面の果樹園の周りの道路に面して家が建てられている。ため池が作られた時期は、弥生時代までさかのぼれる可能性があるが、ため池を作る分、南側の谷よりも開発は遅れたと考えられている。

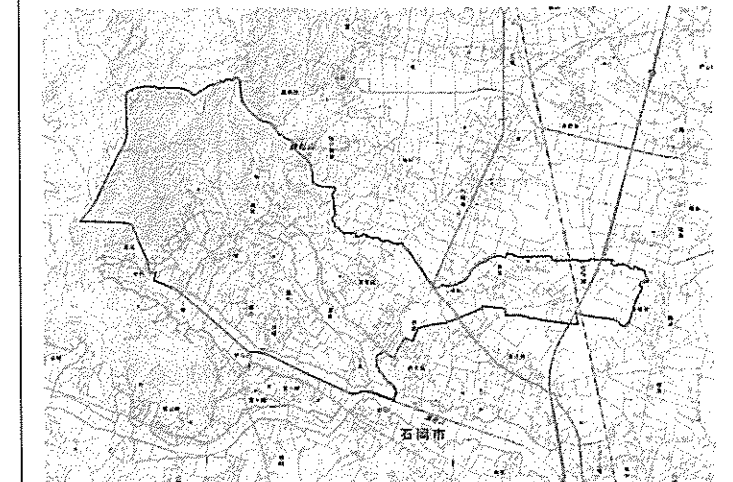


図2. 真家の水田の周囲の道

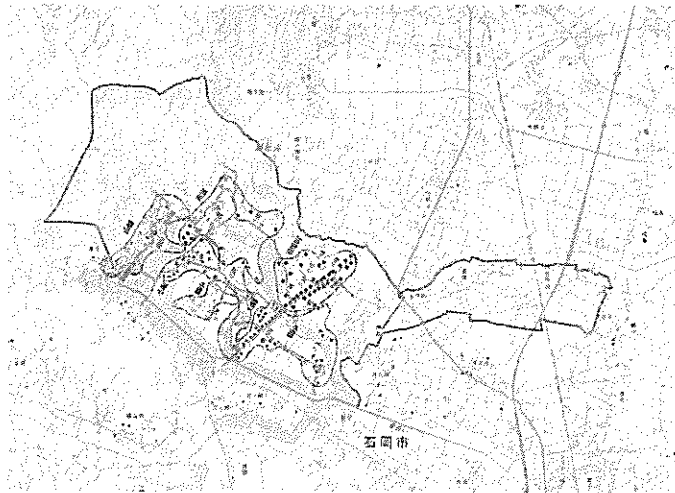


図3. 真家の集落境界

**第5章 真家の先行形態論が現代に及ぼしている影響**

現在残っている真家の集落と集落を結ぶ主要な道路について、先行形態分析を行った。図示した道が行き止まりにならない道であり、また、不自然な枝分かれをしていない道であり、道としては先行形態に当たると考える。集落間を自然に結んでいることが体感される。あぜ道については、昭和60年に土地改良事業が行われ、区画整理が行われているので、古い航空写真で、当時の道を地図上に復元した(図示)。すると、図に示したように、神社を丸く囲む環状の道路から、他の集落へ繋がる行き止まりがない直線的な道は放射状に延びている様子が浮かび上がった。先行形態分析の観点から言うと、この放射状の道路が、一番古い道路であり、多くの集落からここに道が延びているということは、この当りに権力の中心、真家の核があったと考えられるが、ここは字堀ノ内で、この地域の在地領主であった真家氏の館があったところだ。現在は、集落という感じの場所ではないが、道路は、ここに権力があったという先行形態を残している。

次に、市道岩間八郷線です。

岩間八郷線のルートは、図でみるように、北側の谷と南側の谷の間の舌状台地の部分で北西に不自然に膨らんでいます。例えば破線で示したようなルートにすれば道路の距離も短くなるし水田に対する影響も最小限に留められたのではないかと考えられる。

このようなルート取りになった理由については、真家の鎮守である春日神社の敷地や、現在は跡形もなくなっているが、中世の真家氏館の敷地も通過することになることを避けたためかもしれません。

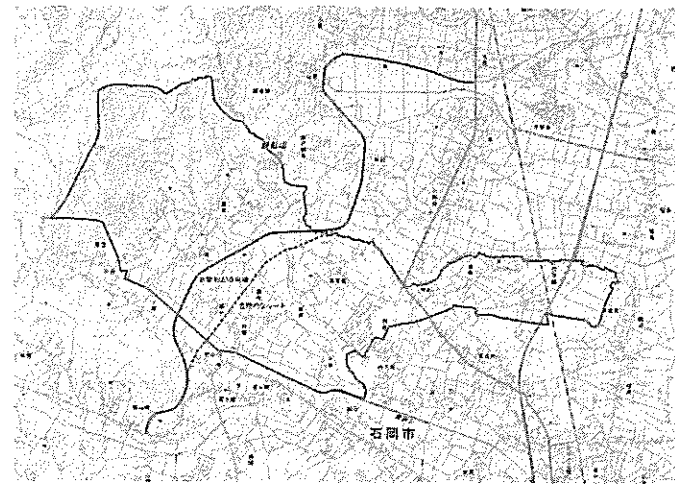


図4. 岩間 B6650 線

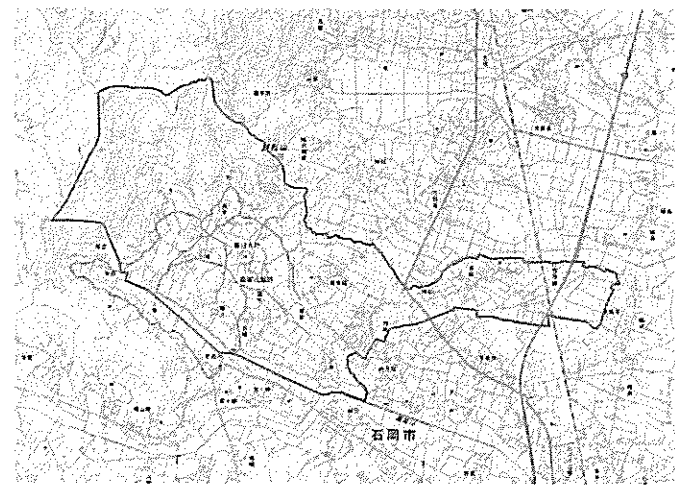


図5. 真家の環状の道

**結論**

真家においては、稲作の成立を契機に集落が成立しており、堀ノ内にあったと考えられる権力体のもとで谷の奥の方へ開発が進んでいったと考えられます。開かれた水田の状況は20世紀になって基盤整備事業が行われるまで大きな変化はなかったと見られます。真家において、水田という先行形態が維持されてきたことで、真家における農村景観は、相当程度、1000年前の雰囲気を残しているのではないかと考える。

では、この真家の景観を今後も残していけるだろうかということについては、山際の水田については果樹園への転換が進んでいること、耕作放棄地もでてきていること、土地基盤整備により、湿田の乾田化が行われたことから、田んぼの中にビニールハウスが建てられるようになってきていることから、谷地に広がる水田という景観は、今後失われていく恐れがある。

**引用・出典**

- 図1. 筆者作成
- 図2. 筆者作成
- 図3. 筆者作成
- 図4. 筆者作成
- 図5. 筆者作成

**参考文献**

- 玉城哲、旗手勲(1974)『風土 台地と人間の歴史』平凡社選書
- 八郷町(2007)『八郷町史』株式会社エリート印刷
- 木村礎(1978)『日本村落史』株式会社弘文堂
- 永原慶二(1968)『日本の中世社会』岩波書店
- 田林明、林秀司、吉村忠晴(1994)「茨城県八郷町真家地区における生活形態の変容」、『地域調査報告』

- 兵庫「ため池講座」、  
<[https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk11/af08\\_000000031.html](https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk11/af08_000000031.html)>  
(参照 2017\_10\_10)
- 国土交通省ホームページ「道の歴史」  
<<http://www.milt.go.jp/road/michii-re/1-3.htm>> (参照 2017\_10\_10)